

[翻 訳]

『スペクテイター』(9)

——第76号から第85号——

門 田 俊 夫

第76号 1711年5月28日(月曜日)

【スティール】

セルスス、君が好運に恵まれているときには、
我々は君のことは我慢しよう。(ホラティウス)¹⁾

ひとの振舞いを観察していると、気分にもうがなれないと思っていた人物がわけの分からない突発的な気分によって自分を見失い、最初の印象とは全く違う人になってしまうといったことはよくあることです。これは自分で人生の法則、つまり、状況全般に対する考え方を確立していないことに由来します。人生の法則を確立していれば、心身ともに適切な習性が身につくものです。これを怠っていると、通常の社会生活において、見苦しい軽率な行為を人目にさらすだけでなく、友情や協力関係においても同様に不安定な関係を生み出すことになります。周囲の出来事に単なる傍観者をきめこみ、いかなる社会生活にも携わらない人物は、人目につかない心の動きは分からず、徐々に、自分でもはっきり分かるくらいの変化を迫られることになります。ところが一方で、世間の人々の矛盾した振舞いの影響を一切受けない人の場合には、その人の考察はこの上なく楽しくかつ有益なものとなるに違いありません。

1) ホラティウス『書簡詩』1.8.17.

ん。だが、そういった観察を贅沢に楽しむためには、いわば監督者の地位につき、人々の運命を知らなくてはなりません。そこで私は親友の古美術商が珍しいものだといって貸してくれた隠れた歴史物を読んで大いに楽しんだのです。その珍しいものとはフランスのファラモン王の私生活に関わる伝記なのです。²⁾作者によりますと、ファラモンは人間性と寛大さを無限に備えた王であると同時に当代きっての愉快でひょうきんな人物でもありました。彼には（ほかの王の場合だと嘆かわしいことだったと思える）一風変わった趣味がありました。彼は対等な人たちだけの交際には大きな喜びは生まれないのだと考えていました。そして、自分は大勢の人たちに囲まれて暮らしているが、このフランスで友と交われないのは自分だけだと快活に嘆くのでした。こういった考えの持ち主である彼は、夜中に寢室付きの召使を一人だけ連れて散歩するのを大きな楽しみとしました。彼はこの散歩で（その性格を試して見ようとする）人々を見つけ、こっそり第一大臣に会わせて詳しく観察させました。人々は自分たちが偉くなれるのだという希望を抱くとすぐに、大体、彼は彼らに無視されることに気づきました。そしてそういった時、彼は、恒常的な付き合いのできる人がほとんど期待できないのに、王にその好運を忘れさせるのは大変不公平であると言うのでした。作者は、こういった漠然とした暗示の中で、ファラモンの非凡な才能を生き生きと伝える文章を書いている箇所があります。彼はすでにいつものように試したことのある一人の人物と顔を合せました。その人物のことは隅から隅まで分かり、彼の目的も分かっていました。ある日彼との話の中で、ファラモンは希望はどれだけなら満たされるか言わせました。王は直ちに身分を明かし、金額を2倍にして、つぎのように語ったのです。「お前には、ファラモンの好意によって、望みの2倍やる。だが、それで満足せよ。これで最後なのだから。今後余はお前のことを家来と考える。決してお前は今よりも偉くも惨めにもさせないと誓おう。返事は無用だ。余の与えた好運を享受するがよい。余よりも勝っている

2) ファラモンは418年から428年まで支配したと考えられている古代フランスの伝説上の王。

好運を。なぜなら、お前は今後望むことも恐れることもないのだから（と王は笑いながら話を締めくくりました）。」

このようにして王は友をうまく選び手に入れたので、愉快的私人と崇高で強力な君主の楽しみを交互にもったのです。彼は友と共に、自分のことを陽気な暴君と名付けました。というのは、彼が廷臣たちの尊大さと愚行に対して処罰を与えるのは、それが人民に不興を買う行為であるからではなく、氣紛れに彼らの心につけこんだ結果がそうであったときだからです。彼は目下のものにとって扱いにくい人物がいると分かると、その人物に好意的な心配りを示し、鼻持ちならない人物にする好機と考えます。彼は自らの表情、言葉、行為にはすべて演技があることが分かっていました。友のムッシュー・ユークラット（彼はそう呼ばれていました）は野心のない大きな心の持ち主でしたので、彼には考えていることすべてを話すことができ、悪用される恐れは一切ありませんでした。二人だけで世間の出来事についてあれこれ話し合うのは大きな楽しみとなったのです。

ファラモンはしばしば、権力に自惚れている愚か者を満足させるために、廷臣一同が居並ぶ前でその愚か者に話し掛けるのでした。そして、ファラモンが一言囁くだけで、彼は旧友や知人全員を侮蔑することになるのでした。彼は長年にわたる観察の結果、人々は彼が三度話し掛ければ、その人の性格がすっかり変わるのだということが分かりました。好運は彼の思いのままでしたので、単なる追従者をそれ相当にあしらうのをいつも楽しみとしていました。半ば笑いながら巧みな目配せをすることで、ひどく嫌っている二人にあたかも心底そうであるかのように、また相手の息の根を止める積りででもあるかのように、抱擁させたり、相手の首を絞めさせたりするのでした。上機嫌のときには、ユークラットと一緒に舞台のお膳立てをし、廷臣たちみんなの気持ちを吐き出させて夕べを過ごすのでした。傲慢な美人がこれまでずっと侮蔑してきた男なのだが、ファラモンが好意的な心配りを示して男のだと気づかせた後で、彼女がその男の表情を見つめているのを見て彼は満足するのでした。その男は前日まであれほど恋い焦がれていた女性についてゆくよ

りも出世できるのだという希望を抱くことになるのです。人々が親愛の情はこの上なく力強く、嫌悪の情はこの上なくかすかな声で口にする宮廷で、それぞれ賞賛あるいは冷遇に伴う恩恵あるいは恥辱次第で、ある場合にはごまかしが消え、またある場合には強まるのを目にするのは、おかしいことでした。人間の卑劣な言行について、ファラモンはしばしば陽気に「自分は五感を取り去れるので、百の感覚を授けることができるだろう。不興をかこつ者には直ちに持って生まれた資質はすべてなくさせ、愛顧を得ている者には天使の特質を授けてやる」と言いました。これは宮廷の下級の連中のことだけではなく、気に入られているかいないかによって、人は誰でも自分のことを卑しく見たり、立派に見たりするのだと彼は言っているのです。

ファラモンのように機知とユーモアを備えた君主は、他の誰もが享受できない楽しみを持っていたに違いありません。彼は冷静に受け止めることが出来る者にだけ好運を授けました。つまり、彼は観察を気高かつ偏見のない形で活用し、大臣たちを自分にとって好ましいものとしてではなく、王国にとって有益だと考えたのです。これによって、ファラモンは国務全般に目を光らせ、自分と似通った徳を備えていない人物には権力の座につけなかったのです。

第77号 1711年5月29日（火曜日）

【バジエル】

我々是一緒に暮らしてはいけない。

これほど近く、また、これほど隔たっている者も

町にはいない。（マルティアリス）¹⁾

友人のウィル・ハニコームと一緒にいるときにしょっちゅう心ここにあらずといった状態になる、いわゆるフランス語でいう「夢想家」「粗忽者」に当

1) マルティアリス『警句』1.86.8-10.

る人物です。昨夜、私たちはクラブの開く時間の少し前、一緒にサマセット・ガーデンを散歩していました。そこで、ウィルはとても変わった形の小石を拾い、友人の高名な美術愛好家にプレゼントするのだと言いました。しばらく歩いて、私は西に向いてピタリと足を止めました。これはウィルには私がいつも時間を尋ねるときの所作だと分かっていますので、彼はすぐに時計を取り出し、まだたっぷり7分あると教えてくれました。私たちはさらにあと1、2回行ったりきたりしていました。するとそのとき、とても驚いたのですが、彼がテムズ川に向かって時計を放り投げ、とても落ち着いた様子で、拾った小石を時計隠しにおさめたのです。元来私はお喋りが嫌いで、まずい情報は、特にそれが手後れで言っても無駄な場合は、知らせたくありませんでしたので、彼の過ちはそのうち自分で分かるだろうと何も言わず、散歩を続け、人にあるこのような放心というか注意散漫といったことについて思いを巡らせ、それを今後の思索のテーマにすることとしました。

非常に分別のある人の場合にもこれがしばしば傷となっているのだと考えたとき、私はこの着想に一段と確信を強めました。そしてこれはドライデン氏がつぎのように翻訳しています古代ローマのことわざを再確認するのに役立ちました。

優れた才知は確かに狂気に縁が近い、

両者を隔てているのは薄い仕切りでしかない。²⁾

読者のみなさんは、私が何か別のことを考えているための放心と何も考えていないための放心とを区別していることに気づいて戴きたいと思います。後者はあまりにも無知な人物の場合ですので気に留めませんが、前者の放心は一般につぎのような理由から説明がつくものと考えます。

放心する場合は、数学者³⁾やその他の学者の場合によくあるのですが、一心

2) 「優れた才知は確かに狂気に縁が近い」(聖賢は大愚に似たり)ということわざで、プラトン、アリストテレス、セネカにも登場する。ドライデンの二行連句は『アブサロムとアヒトペル』163-4行。

3) サー・アイザック・ニュートンのことを念頭に置いているのだろう。

に何か特定の学問に集中しているか、心を何かその場にはないものに結び付ける怒り、恐怖、あるいは愛情といった激しい情念に取りつかれている場合かのどちらかなのです。結論的には、放心は気性にある種の活気があり、また移り気な場合に生じます。こういった気性ですと、ありとあらゆることに考えを巡らせ、絶えず次から次へとせきたてられ、ひとつのことに留まらせてはくれないのです。従って、こういった人物の考えていることは異様なものはほかには見られません。同席している人あるいは目の前にある物によって彼らの考えが引き起こされることはめったにありません。美人に感心しているなと思っていても、ユークリッドの命題を解いているといったことがよくあるのです。また、パリのガゼット紙を読んでいるなと思っていても、頭の中ではカントリーハウスの正面の取り壊しと再建をしているということがあり得るのです。

私は他人に見られるこの弱点をあばいているのですが、私自身かつてこれを経験したことがあることをあっさり告白したいと考えます。これを克服するために私がとった方法は、どんなものであれ私が目にしていることあるいは耳にすることから何かを習得するのだという固い決意を持つことでした。その思考方法に到達できればの話ですが、何事からでも何かは習得できる方法があります。私は目下、非常に完成された雄弁家が存在した輝かしい時期と同じくらいの満足感を持って、無骨者の行動に見られる良識のほとぼしりと洗練されていない理性の闘いを観察することができます。私は人形芝居やオペラをハムレットやオセロと同じように注目することができます。⁴⁾ 私はいつも一員として同席の人々と交わっています。私は自分のことはほとんど口にしないのですが、私が示す他人への配慮や決して不相応にうなずかないことを見ていただければ、私が十分に仲間入りをしていることが分かります。ところが、ウィル・ハニコームは良識のある人なのですが、日々いろいろなことを言ったり行なったりしているのです。彼は後から育ちのよい人

4) 『ハムレット』は5月3日、『オセロ』は4月24日にそれぞれドゥルーリー・レイン劇場で上演された。

らしく包み隠さず打ち明けるのですが、それは少々「場違い」で心にもないことばかりだということです。

私は先日コーヒーハウスに入って行きまして、ウィルが彼の集めた聞き役数名に取り巻かれて、モル・ヒントン⁵⁾の人柄について講釈している場面に偶然出くわしました。私の出現は彼に私のことを思い出させただけで、彼は私がいかにそこにいるとは思えなかったのです。そして、私をじっと見た後、周りの人たちはとても驚いたのですが、熱弁を急に取りやめ、「おやおや、(私の名前を口に) 我が友だ。彼はいろいろ考えは持っているが、決して口を開かないのだ。彼は今頃きっとあの短い顔を王立取引所周辺のあるコーヒーハウスに突き出していることだろう。カトリック陰謀事件の際には私が彼の保証人になったのだ。彼はイエズス会士として捕縛されたのさ。』⁶⁾と言ったのです。彼がもう少し長く私に目をやっていたら、そのような妙なことは考えずに、もっと詳しい描写となっており、一同は必ず私のことが分かったに違いありません。そこで、私は「去る者は日々に疎し」という古いことわざを思い出し、部屋から出て行ったのです。そしてその1時間後、彼に会うと、彼は上機嫌で、この3日間会っていないけど、一体どこにいたのだい、と言うのでした。

ラ・ブリュイエール氏は「粗忽者」の性格についてユーモアたっぷりに語っています。彼は粗忽者を愉快な途方もない考えをする人物と見ています。その冒頭部分を引用して、本日の紙面を締めくくりたいと考えます。⁷⁾

「(この優れた著者は語ります) 朝、メナルカスは階下に降りてきて、外に出ようとしてドアを開けます。でも、再びドアを閉めます。ナイトキャップをかぶったままであることに気づくからです。そしてもっときちんと見てみると、ひげは半分しかそっていないく、剣は右側にさしており、靴下はかかと

5) 当時ロンドンではよく知られた婦人。ロバート・グールドの詩『芝居小屋』の第1部でも彼女のことがうたわれている。

6) 第1号参照。

7) ラ・ブリュイエール (1645-96) 『人さまざま』(初版1688)。

のあたりでたるんでおり、シャツはズボンの上にはみ出ていることに気づきます。身支度を整えると、参内し客間に入って行きます。そして枝分かれした立派な燭台の下を背筋を真っ直ぐに伸ばして進み、髪は燭台にひっかかり、宙ぶりになります。廷臣たちはみんな笑い出しますが、メナルカスは誰よりも大きな声を出して笑い、誰が物笑いの種を提供しているのか辺りを見回します。宮廷の入口まで出てくると、馬車を見つけ、自分の馬車だと思ってさっさとそれに乗り込みます。御者は主人が乗り込んだものと思って馬車を出します。馬車が止まると、メナルカスは馬車から降り、中庭を横切り、階段をのぼり、とてもなれなれしく部屋をいくつもさっと通り抜け、寝椅子に身を横たえ、帰宅したと思っています。そこにその家の主人が入って来ると、メナルカスは立ち上がって彼を迎え、どうぞごゆるりと言います。彼は喋り、思いを巡らし、また喋ります。その家の主人は彼のお喋りに疲れ当惑します。メナルカスは疲れはしませんが、この無礼な客人が早くこの退屈な訪問を辞して帰ってくれないものかなと思っています。夜がふけてきても、メナルカスにはことの真相がほとんど分かっていません。

バックギャモンをしているとき、彼はワインと水を持ってこさせます。彼がサイコロを振る番です。片手に箱、片手にグラスを持っています。とても喉が渇いており、時間を無駄にしたくないので、彼はサイコロを飲み込み、同時にワインをテーブルに振り撒くのです。彼は手紙を書き、インク瓶に砂を突っ込みます。二通目を書き、宛名を間違えます。ある貴族が一通を受取り、封を開けて読んでみると「やあジャック、この手紙を受け取ったら直ぐに、冬に備えて干し草をたっぷり用意してもらいたい」となっています。農夫の方にはもう一通が届き、「閣下、閣下からのご招待有り難く拝受しました」となっているのに仰天します。宴会のときには、彼のお皿にはパンがつぎつぎに山盛りとなっていくます。ほかの人たちもナイフやフォークだけでなくパンも欲しいのですが、メナルカスがそうさせてくれないのです。彼は朝、時々家族全員を集めます。そして馬車あるいは正餐を待っていることができず、出掛けて行ってしまいます。そして、その日は彼の姿を町のあちこちで

見掛けることになります。ただし、大事な用件があっても、約束していた場所に現れることはありません。しばしば、彼は完全に誤解されることでしょう。つまり、彼は聞く耳を持っていませんので、大変な愚か者だと、独り言を言い、全く無意識なのですが、百面相や頭をあれこれ振ったりするので、馬鹿だと、相手の顔をじっと見るのですが、相手の挨拶を無視するので、傲慢な人だと、見られるのです。真相は、彼の目は開いていますが、目を使用することはなく、誰もまた何も見ていないということなのです。かつて、彼はカントリーハウスから出掛けて、彼の召使たちが主人から強奪を企て成功したのです。召使たちは彼の喉元に大きな燭台を突きつけ、財布を出せと命じたのです。彼は言われるまま財布をだし、帰宅してから友人たちに強盗にあったのだと語りました。友人たちが事の顛末を知りたがると、召使たちに聞いてくれ、彼らは私と一緒にいたのだから、とメナルカスと言うのです。

第78号 1711年5月30日(水曜日)

【スティール】

君がかくかくしかじかの人物であることは
我々の仲間ということだ。¹⁾

つぎに掲載します手紙はいずれも非常に愉快なもので、私同様、読者のみなさんにもきっとお楽しみ戴けるものと思います。私としましては本日は何も付け加えることはありません。ただ、ケンブリッジからの手紙の末尾にあります文章を借用し、それを本日の紙面のトップに掲げさせて戴くことにします。そしてこの手紙の書き主の気持と同じく、私もその方を私の仲間と考えさせてもらいたいと思っています。

拝啓

1) このモットーはスティールの作。

同封の手紙は、(貴方がその価値がありと考えられたらの話ですが) 貴紙に掲載して戴けますことを期待して送らせて戴いた次第です。ここには驚くべき特質が伺えますので、いつまでも生き長らえる新聞に多少とも掲載されることを期待しても少しも不思議ではないのです。

ケンブリッジの関心事につきましては、雰囲気としましては本当に小生の述べる通りでした。でも、掲載なさるなさらないは貴方にお任せ致します。貴方が適切か否かをご判断下さい。すでに小生は、以前小生がお送りしましたことを取り上げて戴きとてもうれしい思いをしたことがあります。

今後とも引き続き、貴方のご健勝をお祈り申し上げます。

敬具

観察者殿

ケンブリッジ

周知のように、題目を明確にすること、しかも時宜を得てそうすることは非常に重要なことです。そこで、「醜悪クラブ」は元々陽気なチャ××王の時代にケンブリッジで設立されたのだということを貴殿にお知らせるためにペンを執った次第です。非常に大勢の人たちがいるところでは、このクラブに相応しい十分な会員を見つけやすいように、(私の記憶では) 当時は、一同が揃って食事をするというときには、(今では一番こざっぱりしたところですが、当時は、町で最もむさ苦しかった) クレアホールは全員をきちんと収容するには狭すぎるのではと危惧されたのです。非常に大勢の人たちに招待状が出されましたが、招待に楽々応じた人はほとんどいなかったのです。ある人は、ロンドンの本屋で、通りすがりの大きなお腹をした婦人がキスをしたがったのだと申し立てました。確かに彼は大目に見られましたが、実際にはロンドンで女性がキスをしたがったのだとの触れ込みでしたが、その女性はキスの最中に彼の有り金すべてを手に入れたスリに過ぎなかったのだとの証拠が出てきたのでした。また別の人は、顎のくぼみが申し開きとなったことでしょう。だが、この人物については、彼が部屋に入って行ったことで婦人に流産させ、子供たち二人に恐怖のあまりひきつけを起こさせたことが判明

したのです。三人目の人物は、自分はある婦人から大学で最もハンサムな紳士と間違われたのだと申し立てました。だが、問いただしてみると、その婦人は実際には片目がなく、もう片方もほとんど視力がないのだということが分かりました。四人目の人物は、自分はある紳士から最近恋した娘を相当な持参金つきでもらえることになったと申し立てました。だが、この娘は好色で、父親の御者と駆け落ちをしたがっていることが判明しました。そこで、彼女が彼との恋を偽っているのはひとえに有利な結婚をするための方便にすぎないと考えられました。申し開きをいろいろ聞くのは愉快的なことでした。州長官への申し開きと同じように関心と呼ぶものもありました。けれども、最終的にはクラブができ、きちんとした幹事が選出されました。会合の日は「鹿肉の時節」と決まりました。礼拝堂付き司祭には、(不機嫌な顔つきをしているためにみんなから「気難し屋」と呼ばれている、申し開きをしなかった唯一の人物である) キングズ・コレッジの愉快的な人物が指名されました。会長として、テーブルの上席にある脇掛椅子に座る人物を除いてすべての役が決まりました。会長職については、ここでは何をもって優れているかという争点がないために、膠着状態となりました。クラブ設立については、世間の大評判となり、当時ニューマーケットにいらしたチャ××王の耳に入り、非常に満足なされ、「自分は席を同じく出来ないが、雄鹿一對を贈呈しよう」とおっしゃられたのでした。

このクラブにつきましては、後世の人たちが重要な点で誤解しないよう、貴殿に正確な評価を与えて戴きたいものと考えています。なぜなら、将来賢人が貴殿の実史を執筆するときには、世間の人々は貴殿がオックスフォードの「醜悪クラブ」から学位を授与され、入会を認められたと知らされることになるからです。将来の批評家たちの間では、このクラブの起源に関して学問上の論争が激しく展開されることになります。この問題は両大学がとても熱心に争うことになるのです。ことによると、ケンブリッジ大学出身の大胆な作家の中には、オックスフォードという語はケンブリッジという語をオックスフォード大学出身の作家の誰かが改ざんしたものだと言主張する者が出現

するかも知れないのです。この一件は貴殿の存命中にうまく解決されることでしょうが、貴殿が母上を愛するあまり、伯母上までもえこひいきなさらないことを希望しています。

私自身の意見を申しますと、公に認められています「醜悪クラブ」の条例に関する古い記録は見つからないのですが、非公式には確かにとても古いものは見つかっているのです。このクラブはルーンガーズ²⁾にその地位を譲ることはないものと私は納得しています。ルーンガーズも大学そのものと同じくらい歴史のあるものなのですが。

私たちには貴殿が正当な扱いをするのに動機を必要としない人であることは十分分かっていますが、貴殿にケンブリッジで同程度の学位を授与する旨をお伝えするよう依頼されました。これは当大学の総意とお考えて戴いて差し支えないものと考えています。

観察者殿

Who と Which の嘆願をお読み戴きますと、³⁾見捨てられたありさまの哀れな嘆願者は、周りの人々ほとんど全員が危害を加える存在ですので、どなたに救いを求めているのか分からない状態であることがお分かり戴けるものと思います。とても悲しいことなのですが、まさかと思っています貴方までもが私たちの不平の種となっているという疑いを晴らすことは出来ないのです。私たちの家系は古く、長年にわたって威厳と名誉を保ってきましたが、私たちに取って代わるジャックスプラットの That が出てきたのです。⁴⁾私たちは説教壇の牧師、法廷の弁護士たちからどれだけ軽んじられてきたら気がすむのでしょうか。それだけではありません、大変な屈辱なのですが、最も

2) 第54号参照。

3) 『スペクテイター』では、特にアディソンの場合、関係代名詞 Who, Which の代わりに That が用いられている。歴史的には、関係代名詞の That は Who や Which より古い。

4) ジャックスプラットは伝承童謡の主人公。肉の脂身を食われず、逆に、奥さんは赤身が駄目だったという話。

洗練され威厳のある集まりにおいても、××閣下が力説する That という言葉を耳にします。これを正當に評価しましたら、××閣下が力説する Whichの方がもっと崇高に聞こえたことでしょう。イギリスの自由の守護者である評議員会自身も私たちの面目を失わせ、私たちより That を好んでいます。だが、これまでに私たちを用いてはならないという命令は出てはいません。すべての人、言葉、物に最大限の公正を尽くすことになっている議会条例そのものでは、私たちは用いられないか、一方が用いられるかのどちらかです。最初でかつ最善のお祈りでは、子供たちは私たちの間違った使い方を教えられる。「天にいます我らが父」は Which ではなく Who となるべきなのです。聖職者会議でさえ、長時間にわたる論争の末、その変更の承諾にはいたりませんでした。私たちの行なう一般懺悔の「ああ、罪をお聴きになれる主なる神よ、どうかお赦し下さい」でも、Which ではなく Who を用いるべきです。祈禱書や法律の製作者や最も優れた学者たちが徒党を組んで私たちに背いていると思われ、私たちの敵が私たちの裁判官になっているときに、私たちは公正な裁きをどこに期待できるのでしょうか。

スペインのことわざに「賢者は考えを変えるが、愚者は決して変えない」というのがあります。⁵⁾そこで、私たちは貴方が納得して考えを変えることができるお方だということをよく承知していますので、嘆願先としまして貴方が相応しい方だと考えた次第です。貴方は上手くこの一件を解決できるお方です。私たちそれぞれの境界線を定めて戴き、今後は共に活躍の場が与えられることを願っています。大学評議員会での審理を期待しますが、弁論では私たちの申し立ては裏切られるのではないかと危惧しています。それにまた、私たちはあまりにも長年にわたって虐げられてきましたため、お粗末な形しか手だては残されていないのです。以上の事情をお察し戴き、何卒公正な判断をお願いします。

敬具

5) 「君子豹変す」に相当するこのことわざは、ティレーによると、イギリスでも17世紀に登場している。

第79号 1711年5月31日（木曜日）

【スティール】

善良な人は美德を考えて罪を犯すことを忌み嫌う。

（ホラティウス）¹⁾

私のもとに、女性の読者から非常に沢山の手紙が舞い込んでいます。大半の女性は、私が女性の喜びを減らしていること、そしてそれ自体どうでもよいことに厳しい見方をすることで大層立腹なさっております。でも、この非難はきわめて不当だと考えます。私が主張していますのは、副次的なものとしかわれぬ長所はそれよりももっと重要な事柄より優先させるべきではないということなのです。情念を征服することについて半生をかけて講義を受けても、男性の心はその人を欺きます。女性の心も不実になることがあると考えてはいけない理由が私には分かりません。かりに男女両性の能力が平等だとしましても、女性の精神は戒律という面では男性ほど教化されていません。その結果、女性を軽視するわけではありませんが、持ち前の性癖から、美德という観点からはずれる場合には、錯覚に陥りやすくなるのです。本日は、婦人からの短信を1、2通取り上げて論評を加え、立派な婦人でも判断を誤ることがあるのだと考える私の考えにつきましては、その是非を読者のみなさんに考えて戴きたいと思います。

つぎの手紙の内容を読みますと、筆者はひとえに、自分は好きなようにしますと私に伝えているように思われます。

拝啓

私は若く、心から清純な道を歩みたいと思っていますが、その一方で、私には財産も社会的地位もそれなりに備わっていますので、素敵な喜びを放棄したくありません。広く賞賛されることには少なからぬ満足感を覚え、将来

1) ホラティウス『書簡詩』1.16.52.

の夫の紳士に愛されることにはもっと大きな満足感を覚えるのです。でも、あと1年は結婚する考えはありません。(気難しい貴方がどのようにお考えであろう) 私は音楽を聴いたり、芝居を見たり、訪問したり、その他清純さと美德に守られた財産と若さが提供するあらゆる楽しみを享受しながらこの1年をおくる予定なのです。

敬具

M.T.

追伸

私の恋人には私の気持は知られていません。そこで約束はしていませんので、このままこの状態を続け、他にもっと素敵な人がいないかあたってみる積りです。

ウィル・ハニコームが「女性は追伸の形でしか本音を明らかにしようとし²⁾」と言っているのを聞いたことがあります。この手紙の淑女は追伸で十二分に本音を明らかにしているものと考えます。どうみても、この女性は現在の男性では気に入らないのです。決まるまでにはあと10人は必要であり、しかも最悪の男性をつかむことになるのは確実です。見た目だけで感じる愛情には際限がなく、視覚のみで受け止める情念を制御するくらいなら、見ることで目を満足させる方がましなのです。洒落者がしばしば女性と上手くやるのは見た目で愛情を覚えるからなのです。また、娘にそれまで1年間ひそかに想いを寄せてきた男性がいるにもかかわらず、両親が(無邪気そのものの)娘を別の男性と結婚させるといったことがしばしば起るのもそこに原因があるのです。男性もそうですが、女性に欠けていることは、賞賛に足るものを愛する気持なのです。恥ずべきものを容赦してはならないのです。

ユードーシアはこういった浅薄な考えの持ち主とはなんと掛け離れた存在でしょう。³⁾彼女には生き方、育ちのよさといったものがごく自然に備わって

2) ベーコン『随筆』「巧妙について」参照。

3) ギリシャ語では「素晴らしい才能が付与された」の意。

いますので、高潔な彼女の振舞いは意図的というよりも天性のものに見えます。彼女にとって、人物や事物を正當に評価することは、彼女にとってはいとも容易なことなのです。それは、悪し様に考えたり無様に見えるのが別の女性には容易であるのと同じことなのです。最初に教えられたことが習慣化しているのです。ユードーシアにとっては、間違った考えをもつことは難しいのでしょうか。それは、立派な踊り子フラヴィアが、不釣合いな態度で登場できないのと同じことなのです。

ところで、人々が自分たちの精神状態について誤解していることは、つぎの手紙にははっきり述べられています。つぎに引用するものは、魅惑的なヘカティッサ嬢⁴⁾の思いやりあふれる手紙の抜粋させてもらいました。彼女は表面的な美しさに自惚れず、心の完璧さというものがよく分かっている人です。

拝啓

貴方にお約束戴きました婦人の蔵書の目録が払底していますため、私自身もさることながら、非常に多くの婦人がこれまで以上に鏡に向かって時間を多くなっていることをお知らせするためにペンを執った次第です。⁵⁾作品の選定に際しましては、特に祈禱書に留意して戴きたいものと希望しています。どの書物を何冊くらいにするかは、すべて貴方にお任せしなくてはなりません。ひとえに著作の適否にかかっているからです。朝晩毎日1時間私室で過ごし、どれもこれもおしなべて無意味なものばかりなのですが、ある種の感動をして（その程度の興奮ならワイン一杯、シトロン水一杯で奮い立たせた方がましなのですが）祈禱書6、7冊のお祈りを読めば、残りの時間は情熱のおもむくまま何に使ってもいいのだと考えるご婦人方がいらっします。（貴方のおっしゃる）「偶像」である美貌のフィローシア⁶⁾はそんな一

4) 第48号参照。

5) 第37号参照。

6) ギリシャ語では「自己愛」の意。ロバート・バートン（1577-1640）は『憂鬱の解剖』（1621）1.2.3.14で自己愛について論じている。

人です。彼女はとても立派な私室を持っており、定まった時間にその部屋に引きこもります。彼女にとってこの部屋は、礼拝堂であると同時に化粧室でもあるのです。終始大きな姿見の前から離れることなく、とても賢明な著者によると、テーブルの上には「祈禱書と化粧品がならんでおり、罪人と聖人を同時に醸成する」⁷⁾のです。

その場に居合わせることができ、この偶像が天を仰いだり、愛しい自分の姿を盗み見したりしているのを目にすれば、誰だってあきれかえるに違いありません。自惚れと屈辱の滑稽な葛藤にならざるを得ないのです。貴方がこの件についてお考えになられる場合には、どうか精神を高揚させる書物を選び、取るに足らぬことは目を向けないで下さい。適切な教示が不足していますため、人生の営為から関心をそらされていることにかこつけて、多くの人々が不機嫌でおこりっぽくなるのだと考えてしまいがちです。人々はその一方で、務めとしての義務を果たし、不機嫌になったり、1週間ぶっ通しで良書を読んだりして、自分への愛着を示すのです。私はこういったことはたいい無分別な書物そのものに起因するものと考えます。例えば、「1週間の祈り」⁸⁾といった題名が付いたり、信心に期限があると思わせるような書物が、凡人に大きな誤解をさせ、徳性とはまったく異質の心の通わない信仰心を植え付けるのです。私の知っている人に、全面的にこの種の献身に身をまかせている婦人がいます。彼女は1日6時間から8時間カードゲームをしています。必ず1時間はお祈りをします。その間、片手にはカードが握られており、その1時間が過ぎると、一切不安を覚えず夜中の2時ないし3時まで再びカードゲームに没頭するのです。このような行為は空虚な見せかけにすぎず、いわば、美德に対してお愛想をしているにすぎないのです。心はその間ずっと、真の喜びに動かされることはありません。多くの人々が自分を徳高

7) サミュエル・ジョンソンが辞書に作者不詳として引用しているこの詩行はハリファックス伯の作と考えられている。

8) これは1679年にG.B.が出版し、1686年までに11版までなった『聖餐を立派に受けるための1週間の祈り』のことに触れているのかもしれない。

いと思っているのはここに原因があるのだと私は考えます。つまり、自分を徳高いと考えるのは、気取りからではなく、ひとえに罪悪感が欠如しているからなのです。友人や召使にこの上なく尊大な振舞いをするダルシアナラという人物がいます。これも気取りからではなく、(彼女の思慮にかけるといいますと) 誰も彼女の欠点を見出せないからなのです。確かに、彼女には氣遣って心の内を喋れなくなるような秘密はひとつもありません。そのために、彼女は知人には無礼なまでに無愛想で、家族のものたちにはその場に相応しくないほど横柄になるのです。どうか、私たちの徳が心の内面に向かわせ、真に徳高い場合には、悪徳への軽蔑には常に悪徳への憐憫が伴うのだと確信させてくれるような書物を紹介して戴きたいものと願っています。あれこれ申し上げましたが、何卒よろしくお願い致します。

敬具

B.D.

第80号 1711年6月1日(金曜日)

【スティール】

海を渡ると、気候だけでなく考えも変わる。(ホラティウス)¹⁾

1688年のある日、ロンドンのチープサイド²⁾で、ブルネッタとフィリスという顔も姿もとても奇麗な二人の女の子が生まれました。³⁾二人の両親が親しかったために、この二人にとってはお互いが最初の知り合いとなりました。

1) ホラティウス『書簡詩』1.11.27.

2) セント・ポールのパターノスター・ロウからポウルトリイにかけての賑やかな通り、生地商、金細工商、婦人帽販売店、居酒屋などがあった。そばには商人たちの住居もあった。

3) ダーネル・デイヴィスは『スペクテイターの西インドに関する評論』(1885)の中で、この挿話の出典は、ウォルダックという船長がバルバドスからチャーターハウスの薬種屋ジェームズ・ペタイバーに宛てた1710年11月12日付けの手紙にあるのではないかと指摘している。

遊ぶのも、着せ替え人形をするのも、家を訪問するのも、ダンスを習うのも、お辞儀をするのもいつも一緒でした。いとけない子供で出来る気晴らしはどんなものでも、切っても切れない仲だったのです。この無邪気で幸せな関係は二人が15歳になるまで続きました。15歳になった頃、たまたまフィリス夫人が娘にとっても素敵な頭飾りを与えたのです。そのため周りの人たちののはその後二人の仲の良い関係を微笑ましく見ているのではなく、どちらが美人かということに注目するようになったのです。二人は今ではもはやこれまでのように幸せな心の安らぎや心地よい怠惰なところはなくなり、お互いは相手の言動をすべて誤解し、一方の話や振舞いに優れた点があると、それを相手に勝ろうとするために張り合っている行為なのだと考えました。このような当初の嫌気はまもなく形式的な振舞い、漠然とした冷たさ、そして、当然のことながら取り返しのつかない憎しみへと進展して行きました。

美人で評判のこの二人は、容姿、顔の表情、物腰がとても似通っていましたので、二人のいないところで話題にすると、どちらのことを言っているのか分からないほどでした。二人が一緒にいれば、はっきり違いがあるのですが、別々にいるときには、ほとんど区別がつかないのです。ほかの女性たちにとって二人の反目をさらに愉快なものにしているのは、お互いの悪口が相手のことを言っているのですが、必ず悪口を言っている本人にも当てはまるという点なのです。二人は相手よりも勝る新しい洋服のことを考えたり、前回の集まりで相手の魅力に目がいった愛慕者を呼び戻す新しい手段を考え出したりして、夜もおちおち眠れませんでした。相手が現れると、顔色は蒼ざめ、相手の不都合な情報を聞くと、喜びで顔は紅潮し、称賛されているしるしを耳にすると、元気がなくなるのでした。二人は同じように抑制された怒りに苦しんでいたのですが、女性が強制されています身だしなみのお陰で、憤りを抑え、あらわに爆発させることはありませんでした。例によって、母親同士も娘たちの反目に首を突っ込み、豊かな財産があり分別に欠ける人たちにありがちな無駄な出費をして娘たちの主張を援護するのでした。考えつく限りの華やかな外見をさせるといふ点では、娘たちはまるで五月祭の女王

のように、両親より優先されました。そして、毎週日曜日の教会では、どちらが美人かを巡って、人々の目にさらされるのでした。

こういった苦闘が続いているとき、たまたまある日、フィリスは一般祈禱のさいに、陽気な西インド人の心を魅了しました。彼は素敵なのかけばけしいのか分からないほどのきらびやかな服装をしていました。常夏の国でスーツ姿のこのアメリカ人はとても際立っておりまた陽気な人物でしたので、フィリスも魅了されたのです。彼はフィリスの魅力の虜になり、ブルネッタが気をひこうとあれこれ苦心しても振り向きもしませんでした。このすぐ後、ブルネッタは自分が大勢の男性から誉めそやされて親切な心遣いを示されるが、誰からも結婚の申し出がないのに、ライヴァルがその金持ちと結婚することを知って屈辱を覚えました。フィリスはバルバドスの夫の住まいに伴われて行きました。ブルネッタはことあるたびに意地悪く彼女の消息を尋ねました。そして不幸にも、彼女が大勢の奴隷にかしずかれ、眠っているときにもたえず扇であおられ、外出するときは異邦の豪華絢爛な衣装を身にまとっているのだということを知ったのです。ブルネッタは再三再四入って来るこういった情報に我慢できず、死ぬまでもう一度彼女と対決したいとの一心から、彼女と同じ国の金持ちを獲得しようとありとあらゆる手練手管を駆使しました。ついに彼女の筋書き通りになり、敵の夫の地所と隣接したところに地所を持っている紳士と結婚しました。相容れないこの二人の美女が互いに出しぬこうとした例は枚挙にいとまがありませんが、そうこうしているときに、たまたまフィリスの友人宛ての船が島に立ち寄りました。ブルネッタに着荷に気づかれないうちに、衣装はすべてフィリスにその優先権を与えるとの指示がありました。その友人はその通りに、フィリスはたちまちその地方では今までに見たこともないような豪華で高価な綾織りの衣装で着飾りました。ブルネッタはそれを見て気をなくし、どうあがいてもライヴァルのきらびやかさには追いつくことが出来ませんでした。彼女は苦しい胸の内を誠実な友人に伝えました。その友人は、フィリス側の商人の妻との関係から、ブルネッタに同じ絹織物の残りぎれを斡旋しました。フィリスは必ずブル

ネットと出会うことになる公の場所に行くのが苦痛になりました。ブルネットは今ではフィリスを侮辱する積りで、フィリスと同じ綾織りのペティコートを着せた美しい黒人の娘を従えて、自分は平織りの黒の絹のマントを羽織って舞踏会に姿を見せたからです。この光景は一同の注目を浴びました。不幸なフィリスは気が遠くなり、すぐに自宅に連れ帰られました。彼女は意識を回復するとすぐに、夫の家から逃げ出し、停泊している船に乗り込み、今、悲しみに沈んでプリマスに着いたところです。

後記

以上のような悲しい物語のあとでは、つぎの抗議を読めば、読者のみなさんはおそらく気分転換が出来ることでしょう。

観察者殿へ

傷つけられた That からの抗議書

私は Who 氏 Which 氏の嘆願⁴⁾を否定はしませんが、貴方は彼らが無礼を働いて、誠実な人々の名前を叫ぶようなことを許すべきではありません。なぜなら、そんなことをさせると、貴方が確立なさっている品位の規則にとっても重くのしかかることになるからです。彼らは大学評議員会や法廷での演説の欠陥を見出し、矯正するかも知れませんが、偉大な雄弁家がしばしば私を採用していますように、彼らには文の中で何度も雄弁に繰り返してもらうよう努力させればいいのです。

(彼は言います) みなさん、私が心から申し上げたいことは、こういうこと(That)なのです。要するに、あの紳士が提案なさっておられること(That)はみなさんに立証しておくべきだったということ(That)ではないのです。この疑問の嘆願者には、Who と Which で処理して戴けばよいのです。

モラットに韻を提供するために、ドライデン氏の『インド皇帝』⁵⁾の「あな

4) 第78号参照。

5) 実際は『インド皇帝』ではなく『オーレングジープ』(1676)という作品。

たはそれでも無理やり私にその件 (That) ではあなたに返答させるのです」に私はとても好都合なのです。それに、「いやはや、そんなこと (That) とは！」という台詞がなければ、ペイズ氏はどれだけ貧相になっていたことでしょう。⁶⁾「これとかそれ (That)」と言わなかったら、思慮分別のある人はどうやって物の区別をするのですか。ののしりの虚辞（実際、これは放蕩者やならず者には何にもまして好都合なのですが）や「つまり (That is)」といった言葉を使用しなかったら、真面目な人はどうやってかなりな長さの話ができるのですか。「つまり」というのは、もっと生真面目な人は That is to say となるのですが。身分の高い人がよく口にする「そういったこと (Such things as that)」や「あのようなもの (The like of that)」といった表現は非常に有益でまた愉快的な言い回しなのです。

貴方がおっしゃる腐敗した話し方を改善することにつきましては私には異議がありません。また、That 以外の単語を導入するよいところあいだということとは認めますが、Who と Which にことごとく代わってしまうことは拒絶します。That の代わりとして、Who と Which が常に適切とは限らないのですから。私は立派な言語と丁寧な処置を期待します。そして今後とも That は That として受け入れられることを望みます。

敬具

第81号 1711年6月2日（土曜日）

【アディソン】

雌トラが狩人たちの騒ぎを耳にするときのように、

怒った黒のまだらが艶のある皮膚を軽蔑する。

（スタティウス）¹⁾

6) ドライデンお気に入りのこの台詞は、バッキンガム公の『リハーサル』やブライアー、チャールズ・モンタギューの『めじかとヒョウ』でひやかしの対象とされている。

1) スタティウス『テバイ物語』2.128-9. スタティウス (45?-?96) はローマの

この前の冬の半ば頃に、私はヘイマーケットの劇場にオペラを観に出掛けました。私の向かいの棧敷席に陣取り、互いに戦闘隊形を組んでいるように整列していると見える二組の立派なご婦人方の一行に注目せざるを得ませんでした。しばらく見ていますと、彼女たちのつけぼくろの付け方が違っているのが分かりました。つまり、一方は額の右側で、片方は左側だったのです。すぐに彼女たちが互いに敵意を持ってちらっと見ており、つけぼくろの位置が違っているのは、味方と敵を区別するための党派性の合図²⁾であることに気づきました。この敵対する両者の間の棧敷席には、右左ばらばらにつけており、ただひたすらオペラの観劇を目的としているように見える数名のご婦人方が席に着いていました。調べてみると、右手のアマゾン軍団はホウィッグで、左手がトーリーで、両者の間に陣取っていた人たちは、まだ身元を明らかにしていなかったものの、中立でした。後ほど分かったのですが、この中立の人たちは日を追うごとに減少していき、いずれかの党に所属したのです。何名かを見ていると、つけぼくろの位置がそれまではばらばらだったのですが、今ではホウィッグかトーリーのどちらかになっているのに気づいたのです。詮索好きな人たちは、それ以外の箇所は持ち主によって際立ち、引き立たせられているのに、顔の一部がこのような汚され、恥辱を受けているのは、想いを寄せる男性の気持にそのきっかけがあるのだと言います。要するに、つけぼくろはお気に入りの男性の主義によって、右についたり左についたりするということでした。だが、公益というよりもむしろ自分のためにつけぼくろをするこういった異様な男たらしの動機がどのようなものであれ、淑女の中に、主義で、つまり、みんなの関心を呼ぼうとしてつけぼくろをする人たちがいるのは確かなことです。いな、私の聞いたところによりますと、最近、仲間に忠誠を尽くしすぎるあまり、特定の人への気持を犠牲にして、

叙事詩人。

- 2) つけぼくろの位置や扇やかぎタバコ入れの種類で党派性を示すことは、『フリーホルダー』で諷刺されている。スウィフトも『イグザミネー』第31号(1711年3月8日)で同様の考えを述べていた。

つけぼくろは夫の考えとは無関係に自分の好きなところにつけるということを結婚の契約条項に盛り込んだ婦人がいるとのことでした。

ところで、ホウィッグ支持で名高いロザリンドはとても不幸なことなのですが、額のトーリー側に実に見事なほくろがあるのです。このほくろは非常に目立ちますので、多くの誤解を呼び、敵方にまるでそのほくろがホウィッグに反乱を起こしたかのように、彼女の顔を誤って伝える口実を提供してきたのです。ところが、この生まれつきのほくろが何を暗示しようとも、彼女の政治に対する考えは変わらないのはよく知られていることなのです。とはいえ、この不運なほくろは洒落者たちを誤解させ、つけぼくろだと思ってしまう、彼女とトーリーへの忠誠心に関する話題を持ち出させるのです。すると突然、彼女は思いも寄らない反論を浴びせ掛け、彼らをまたたくまにやりこめてしまうのです。ロザリンドがほくろのことで不幸だとすると、ニグラニラの不幸は吹き出物なのです。この吹き出物は彼女の考えに反して、ホウィッグ側に出ているのです。

これまで顔に人工的な斑点をつけることは背徳的なことだと教えられていた徳高い多くの既婚婦人が、最近では、熱意に甘んじ、美への関心からこのつけぼくろを受け入れ入れているとのことでした。カウリー氏が本紙のモットーに引用した詩行を模倣して「彼女は矜持に燃え、両側に斑点を生じさせる」³⁾と述べているように、私はこの宣戦布告を耳にすると、怒ると斑点が浮き上がるという雌トラの話を思い出すのです。

前述しましたように、私は劇場にいましたとき、好奇心から双方のほくろの数を数え、トーリーの方がホウィッグより20個ばかり多いことが分かりました。でも、このささやかな差の埋め合わせとして、私は翌朝人形芝居ではホウィッグ風のほくろをつけた婦人を大勢見掛けたのです。私にはこのご婦人方が勢力を再結集するためにここに身を寄せたのかどうかは分かりませんが、翌晩大挙してオペラに出向き、数では敵方に勝ったのでした。

3) 『ダヴィデイス』3.403-4.

この党派性を示すつけはくろの話は、社交界と掛け離れた生活をしている人たちにはありえないことと思われるのですが、これは極めて特異な特徴ですし、おそらくはこれに匹敵するものはないと思いますので、これを報告しないで誠実な観察者としての任務からのがれるべきではないと考えた次第なのです。

過日の紙面では⁴⁾、私は女性に、男性に行き渡っている憎しみと敵意を増大させるだけで、造物主に与えられている女性特有の魅力を大きく奪ってしまうことになる女性の党派性への情熱を明らかにしようと思いました。

ローマ人とサビニ人が交戦し、今まさに戦闘が始まろうとしたときに、双方の婦人たちが仲裁に入って涙ながらに哀願して、双方が恐れていた殺戮を食い止め、双方を和解させ、安定したそして恒久的な和平をもたらしたのです。⁵⁾

このままだと生まれて来るのが不幸となるような、国がいろいろと人道にもとる不和を引き起こし分裂しているときには、私は我がイギリスのご婦人方にはこのあっぱれなお手本を見習って戴きたいものと思います。ギリシャ人は女性が競争や論争に関与することを間違ったことだと考えました。そこで、オリンピックはギリシャの国あげての気晴らしであったにもかかわらず、女性がオリンピックに参加すると死刑にするといい女性たちにはその参加を禁じたのです。⁶⁾

我がイギリスの女性は美しさという点では他の国々の女性に勝っていますので、その他の心得においても秀でて、党派性をむきだしにする人物としてではなく、愛情のこもった母親として、そしてまた、貞節な妻として際立つよう努力すべきです。女性の美德は家庭的なことにあります。家庭は個々の

4) 第57号参照。

5) リヴィウス (59B.C.-A.D.17) 『ローマ建国史』1.13.

6) ベール (1647-1706) 「ベレニス」。ベールはフランスの批評家・哲学者で彼の『歴史的批判的辞典』(1696-97)は18世紀の啓蒙思想家に多大の影響を与え、ヴォルテールが「啓蒙思想の宝庫」と評したといわれる。

女性が異彩を放つのに相応しい領域なのです。もしどうしても世間への熱意を示すのでしたら、それは同じ家族の人たち、少なくとも同じ信仰心を持った人あるいは同国民に反するようなことをするのでなく、自分たちの信念や自由や国に公然と敵対する人たちに抗してゆくものでなくてはなりません。ローマ人が外敵に押し寄せられたとき、危急にさいした政府を助けるために、ご婦人方は指輪や宝石を自発的に差し出しました。これは同国人の目にはとても見上げた行為でしたので、それ以降は、女性の葬儀のさいに、それまで男性だけのものでしたが、法律によって、故人を称えて告別の辞が述べることが認められるようになりました。⁷⁾もし、我が国のご婦人方が敵対するようになつてくろくに固執しないで、心から公共心を抱き、一人一人が共通の敵に対してネックレスを犠牲にすると分かれば、ご婦人方に味方する数多くの法規ができるに違いありません。

このテーマについて私の記憶に蘇ってくる古代の作家の文章を考えていますとき、名高いペリクレスの弔いの挨拶を無視するわけにはいきません。⁸⁾その挨拶とは、ラケダイモン人との戦いで亡くなった勇敢なアテナイ人を称えて行なった挨拶のことです。ペリクレスは同胞に向かって話し掛け、彼らが国のためにいかに勇敢に振舞ったか明らかにした後で、女性に向かって「あなた方については、私の言いたいことは簡単です。ただひたすら、女性本来の美德を追求しなさい。持ち前の慎ましさを大切に、他人にあれこれ言われないことが最大の賛辞だと考えることです」と彼は語ったのです。

第82号 1711年6月4日（月曜日）

【スティール】

槍で威嚇して、奴隷を売りに出す。(ユヴェナリス)¹⁾

7) ベール「カミラス」。

8) トウキティデス『ペロポネソス戦史』2.45.

1) ユヴェナリス『諷刺』3.33.

先日、ラドゲイト監獄²⁾のそばを通りかかったとき、情けを掛けて欲しいとわめいている声が耳に入りました。私はその声を以前どこかで聴いたことがあると思いました。監獄に近づくと、囚人が私の名前を呼び、檻に何か投げ入れて欲しいと言いました。私はうろたえ、言われるまま、半クラウン貨を1枚投げ入れてやりました。私はこういった人々の不思議な性分やそのみすばらしい振舞いについて考えながらその場を離れました。私に物乞いをした人物は、今では50歳になっているものと思います。彼のことは25歳くらいまではよく知っていました。その頃、親族の死去によって彼に相当な財産が転がり込んだのです。この予期しなかった財産を手にとると、彼は可能な限りの放縦に走りました。酔っ払って口論するのはしょっちゅうで、酒場の給仕の頭は割るし、大声でわめきたて、目上の人には無礼に、目下の人には横柄に振舞うのでした。お金があってもなくても、彼の振舞いには同じように精神の卑しさが影響を与えているのだと言わざるを得ません。変わることはないこの卑劣な心が、金があるときには横柄に、貧しいときには破廉恥にさせているのです。この出来事があってから、私は一般に借金をする事情に思いを巡らし、どんな気質がこの過ちに陥りやすいのか、そしてまた、その重荷のもとで悩み暮らすことになるに違いない不幸について考えてみました。私自身のことを言いますと、私は生まれつき人々と目立つような付き合いをすることが嫌いなので、出費をそそのかすようなことはほとんどありません。それに、私の守備範囲はごく限られていまして、私の財産管理をしている誠実な人に年4回の支払い書を渡すことと週1回交換するリンネル類の洗濯代の支払いぐらいなのです。つまり、執事が持ってきた受取りにサインをすればよいのです。洗濯にだすものとしては、シャツ、ネクタイ、靴下、それにそれなりの衣服がある程度です。大体私の仕事としてはそんなものですので、装身具や家計に関して人々がやっていることを観察するゆとりがたっぷりあるのです。

2) ラドゲイト監獄は債務者監獄。

街中を歩いていて、「ここではやっていること違うが、同じように忙しく走り回っている、荷を解いている人もいれば、しばっている人もいる」³⁾といったように、人々があわただしくしているのを見ると、つまり、こういった大勢のいろいろな人たちが上に引用したデナムの詩にあるような目的の達成に向かって努力している様子を見ますと、私は稼ごうとしていることにはさほど奇異な感じは覚えませんが、借金の危険性にこれほど無頓着になれる人がいることが不思議でたまりません。支払期限が過ぎたその時点から貸し手が借り手の名誉や自由や運命にかかわるほどの請求をしてることが借金をする人には分かっていないのでしょうか。貸し手が借り手のことをどんなに悪く言っても、つまり、「あの男は不実な奴だ」と言っても名誉毀損にはならず、借り手に襲い掛かっても暴行罪にはならないのだということが、借り手には分かっていなかったのでしょうか。こういっただらしなく破廉恥な考え方をしているために、絶えず不安を覚えながら生活しなくてはならず、さらに不安の種を増大させることになるのです。恥辱を覚えたり、貸し手から逃げ回っていることほど卑屈な状態はありません。多額の借金を抱えている人は、20人もの人に対してこんな関係を持つことになるのです。現実には、誠実な人が人生の何か大切な時点で軽率な行動をしたり、他人の保証人となったりして債務の責任を背負う込む場合もあります。でも、これは極めて特殊なケースであって、むしろ例外と言えます。従者や威厳はそのまま維持しようとするために、高慢な借金取りがやってくるのではないかとひるんでいる人はたくさんいます。債務者は債権者から見ると罪人であり、私たちが優れた人たちだとみなしている政府の役人はすべて債務の返済をせまる権力者にはかかりません。そこで、殺人者が君主に命の借りがあるのと同じように、債務者が自由にしていられるのは隣人のお陰なのです。

一般的に言って、我が国の紳士階級の人々は債務を背負っており、多くの家では代々そうしてきています。息子が幼いときには、父がすべてを投げ出

3) サー・ジョン・デナム (1615-69) 「クーパーの丘」 31-32.

し、息子は成年に達すると結婚し、それを償還し、妹たちのための持参金を捻出します。もちろん、これは息子にとってはさほど不都合なことではありません。というのは、彼は財産の半分を使い果たすまでそれ相当の紳士と足並みを揃えて、娼婦を買ったり客を呼んで宴会をしたり犬を飼ったりした後で、第一子に同じように譲渡抵当権を残すといったことが出来るからです。誰か活力のある人が出てきて財産を徹底的に食いつぶすか、他人から請求されたり無礼な振舞いをされる対象となっている財産を所持していることをいさぎよしとしない誰か分別のある人が現れるまで、こういった状態は続きます。私の友人のサー・アンドリューは、長年に渡って手広く貿易業を営んでいます。これまで難局にあっても、そしてまた、現在邪悪な人々に取り巻かれていても、一度も訴訟の被告になったことはありません。要するに、誰ひとり、彼との取引に対して苦情を申し立てなかったのです。これは確かにまれなことです。普通は争いで不利益をこうむらないのは珍しいことです。で、市民としてあつぱれなことなのです。サー・アンドリューと私の子供時代からの知り合いでしたが、私たちの忠告を聞かなかったジャック・トゥルーペニーとサー・アンドリューの違いはとても大きいのです。⁴⁾ジャックはこの上なく従順で善良なために、財産は少しもたまりません。彼のお金も名声も能力も自分は後回しなのです。彼は、学校時代には、他人の罪をかぶって週に3回鞭で打たれ、社会に出てからは、他人の借金の保証人になったために年に二、三度逮捕されました。彼の友人が性病に罹ったとき、薬はすべて「トゥルーペニー氏用丸薬、なめ薬」と記載されてジャックのもとに届けられました。ジャックには相当な財産が残されましたが、その財産を要求する人たち全員を信じたため、無一文になりました。彼にはこういった呑気なところと信じやすいところがるために、当然彼が報われてもよいこともすべて彼のものとはなりません。感謝を受けることもなく、善行ひとつすることなく、彼の人生はすべて他人の犠牲となっているわけです。

4) ジャック・トゥルーペニーという人物はかなり部分まではスティー爾自身のことだと考えられる。

最後に、ジャックが訴訟で一晩拘留された後で、債権者のひとり（彼からはもっと丁重な処遇を受けて当然だったのですが）に語った談話を掲載して本日の話の締めくくりとします。

私が示した多くの親切に対して、貴方が恩知らずな振舞いをなされたことを恨んではいません。むしろ、世の中には貴方のような人がいることを見せて戴けたことを有り難く思っているのです。今後は人を信じないようにと教えていただいて感謝している次第です。「これからは借金のことでは誰も信用しない積りです。」

第83号 1711年6月5日（火曜日）

【アディソン】

彼の心はくだらない絵で満足した。（ウェルギリウス）¹⁾

悪天候のため戸外で気晴らしができないときには、気分転換のため私はしばしば友人二、三人と何か好奇心をそそるものを見に出掛けます。こういったときの私の主要な楽しみとしては絵画があります。悪天候になると分かったときには、丸一日かけて優れた画家の作品がある画廊を訪れたことがあるほどなのです。空が雲でおおわれ、地面には雨があふれ、辺り一帯が不機嫌な様相を呈しているときには、私はこのようにして不愉快な場面から身を引き、幻想的な芸術の世界に入り込むのです。その世界で、私は、光り輝く風景や壮麗な見世物や美しい顔、その他気持を陽気にしてくれるいろいろなものと出会います。そして、暗く気が減入る季節に陥りやすいあの陰鬱な気持ちを追い払ってしまいます。

数週間前、この気晴らしをしました。とても印象的でしたので、そのことが朝方、束の間の夢の中に登場しました。本日はこのことを、完成品としてというよりむしろ夢の下絵というか下書きとして読者のみなさんにお伝えし

1) ウェルギリウス『アイネーイス』1.464.

たいと思います。

私は一方が現代の名高い画家、もう一方がすでに亡くなっている巨匠の作品で覆われている細長く広々とした画廊に入っていく夢を見たのです。

現代の画家の側では、デッサンや色付けや図案の構想などで忙しくしている数名が目にとまりました。過去の画家の側では、仕事をしている人物は一人しか見当たりませんでした。この人物は動作がとてもゆっくりしており、筆致が実にこまやかでした。

私の目の前にいる数名の画家について調べてみることにしました。そこで、現代の側に専念しました。最初に気づいたのは、髪の毛を後ろ側でリボンで結わえ、フランス人のような服装をしている「虚栄」でした。彼の描く顔はすべて微笑みを浮かべており、男女、年齢、身分にかかわらずすべての人物に伺える作り笑いの表情が特徴でした。「常に陽気」という表情は、判事や主教や枢密顧問官にまで伺えました。要するに、彼の描く男性は全員、「気取った男」であり、女性は全員「気取った女」だったのです。着衣は顔にとっても似合っており、まばゆいばかりの色合でした。各衣服はそれぞれどぎまぎしながら、他の衣服より際立とうとしているのです。

「虚栄」の左手には、制作に励んでいる職人がいました。彼は、私の見るところでは、控え目に「虚栄」を崇拜しており、彼の真似をしていました。この職人はドイツ人の服装をしており、どうも「愚鈍」というとても硬い名前がついていました。

私の目に付いた三人目の画家は、ヴェニスのスカラムッチア²⁾のような服装をした「風変わり」でした。彼はキマイラの仲間入りをしており、歪みとしかめっ面を特徴としていました。彼は時々自分の絵筆から生まれた幻に脅えました。要するに、非常に苦心して仕上げた彼の作品は、せいぜい恐ろしい夢に過ぎなかったのです。彼が入念に仕上げた人物は愉快的怪物としか言いようがないでしょう。

2) 第37号参照。

四人目の画家は手が早いのを特徴としていました。そのため彼の絵は粗削りですので、(記念碑として子孫に受け継がれることを考えたのですか) 美しさは当の本人の美しさよりも早く色褪せてゆくのでした。彼は仕事があまりにも早いので、絵筆を洗ったり、絵の具を混ぜ合わせたりする暇がありませんでした。この性急な職人の名は「強欲」でした。

この画家のそばには、オランダ人の服装をし、名前を「勤勉」という全く異質の画家がいました。彼の絵は実に入念に描かれていました。彼は、肖像画を描くときには、顔にかかる髪の毛一本、船を描くときには、索具のロープ一本おろそかにしませんでした。同様に、彼は壁面全体に夜景画を吊るしていました。何箇所かにロウソクがともされており、たまたまそこに太陽光線があたって赤くなり、最初は火事だと叫びたくなるほどでした。

以上の五名が現代の側でのとても重要な画家でした。実際には、時間がなくて目を通すことができなかった画家がほかにも数名いました。でも、そのうちの一人についてはどうしても触れておかななくてはなりません。彼は自分独自のものは創作しなかったのですが、完成した作品にせっせと手を入れていたのです。彼の絵筆によって、すでにごてごてと描かれていた顔の造作はさらにどぎつくなり、欠陥はさらに浮き彫りになり、色はさらに濁るのでした。この職人は現代の側には多大の危害を加えましたが、過去の側には目を向けることはありませんでした。名前は「妬み」といいました。

現代の側をざっと見た後で、私は亡くなった巨匠たちの作品が並んでいる方に目を転じました。たちまち、自分が沢山の観客の前に立たされ、多くの人たちの眼にさらされているのだと思いました。というのは、私の目の前にいる人たちはすべて生身の人間のものであって、絵であることを忘れるほどだったのです。一列目にはラファエロ、二列目にはティツィアーノ、三列目にはギドー・レーニの絵があったのです。³⁾ また、他の箇所にはアンニーバレ・

3) ハンプトンコートにあるラファエロの戯画は、第226号と第244号で取り上げられている。ティツィアーノについては第292号で触れている。レーニ(1575-1642)はイタリアのボローニャ派の画家。

カラッチ、コレッジョ、ルーベンスがありました。⁴⁾要するに、亡くなった巨匠は全員、過去の側の装飾に貢献していたわけです。こういった巨匠の描く人物は一人残らず、本物で生きているように見え、異なっているのは国の違いを示していると思える、姿、顔色、衣服だけでした。

(画廊のこちら側で仕事をしているただひとりの画家として私が以前に言及した本人ですが) ある老人が絵から絵へとあちこち渡り歩き、私の前にある見事な作品に手を入れている様子を観察して、私はこの老人の動きに注目せざるを得ませんでした。彼の絵筆はとても軽やかで、ほんのかすかな動きでした。そこで、彼が何度も手を入れているのですが、私には絵に目に見える効果を与えているとは思えませんでした。しかし、彼は絶え間なく制作に打ち込み、再三再四加筆しながら、気に入らないこまかな点を徐々になくしていったのです。同時に、彼は陰に奇麗な褐色を、色調に柔らかさを見事に加えたので、当初よりも絵は隅々まで申し分の無いものとなりました。私はついこの年老いた職人の顔に目をやりました。そして、額に垂れ下がった長髪の巻毛から直ぐに彼が「時」⁵⁾であることが分かりました。

「時」が出てきたのは私の夢の続きがここで終わったためかどうかは、私には分かりませんが、この想像上の老人を見ているときに、私は眠りから覚めたのでした。

第84号 1711年6月6日(水曜日)

【スティール】

このような話をするとき、ミュルミドーンであれ、

ドロビアンであれ、いかめしいユリシーズの兵士であれ、

4) アンニーバレ・カラッチ (1560-1609) はファルネーゼ宮のフレスコ画で知られている。コレッジョ (1494-1534) は本名をアントニオ・アレグリという。ドライデンは『詩と絵画の比較』(1695)で彩色の素晴らしさということでティツィアーノとコレッジョを挙げている。ルーベンス (1577-1640) はフランドル派の画家。

5) ホガースは「絵画をいぶす「時」」(1761)でこのイメージを諷刺している。

涙を抑えることができただろうか。(ウェルギリウス)¹⁾

ファラモンの個人的な行動が卓上装飾用書籍の形で記載されている昔の写本を読んでいるとき、私はとても愉快的な様々なことを発見しました。²⁾ 人間的な生活というものは、どんな時代であれ同じ原理と熱情に基づいているのですので、ファラモンの時代には人間的な生活の教えとしてどんなことが行き渡っていたのか書き留めておくことは適切なことだと考えた次第です。私にこの写本を貸してくれた古美術商は、その宮廷で生活をしていた作者の文章の中から抜粋して、特にファラモンのお気に入りのユークラットという人物を紹介してくれました。この君主と忠実な友に関するこの作者の記述は彼らのことが浮き彫りになる二人の交際について触れる機会に恵まれますので、本紙に取り上げるのに相応しいものと思われまふ。

ファラモンはあわただしい執務や堅苦しさが嫌になって1、2時間引きこもりたくなると、顔に手をやり、窓辺に投げやりに腕を置いたり、他の人たちには関心が無いと思われるようななんらかの所作をして、ユークラットにシグナルを送るのでした。ユークラットはそれに気づくと、(二人の親交は誰にも知られていませんでしたので) 他の人たちに分からないように、王を迎え入れるために自室に行きました。宮廷にある彼の自室には秘密の入口がありました。ユークラットはこの入口から、普通なら従者や門番から追い払われるようなみすばらしい格好をした人たちを迎え入れるのでした。彼らはユークラットの指示で通され、ファラモンに拝謁するのでした。ファラモンはこの入口を不幸な人々の門と呼び、彼の前にやって来る苦悩を抱えた人たちの涙はユークラットが受けとめるおとりだと言うのでした。というのも、ユークラットは、耳に入る些細な苦悩にも心が動かされる寛大な王と同じく、とても情け深い人物でしたので。ユークラットは、不幸を訴える人たちについては、ただ単に贅沢をしたいがために援助を願っているありふれた形の不幸

1) ウェルギリウス『アイネーイス』2.6-8.

2) 第76号参照。

や悲しみを装っている怠惰な人たちは引き立てないように特に注意を払いました。でも、人々に降りかかる不可解な出来事に起因する不幸とか責任がないのに生じる親子の離反とか妻に対する夫の残虐行為とか難破や火災が引き金となって生じる貧困とかその他人々がさらされるひどい不幸の場合には、ユークラットは保護者となりました。そして、彼は誰からも妬まれずにこの王の愛顧を引き出しましたので、彼は誰からも詮索されることなく、他の人が嫌がることに取り組むことが出来ました。

ある日の夕暮れどき、ファラモンはユークラットの部屋に向かい出たとき、彼がひどく落ち込んでいるのに気づきました。そこで王が(いつものように微笑みながら)「どうしたのですか、ユークラットがふさいでいるとは、ファラモンでも救えないほど惨めなことがあるのですか」と尋ねてみますと、この寵臣は「それがあるのです。外にいる立派な身なりの人物は、人生も盛りようですが、何かどうすることも出来ない不幸を抱えて生気をなくしているようなのです。表情には苦悩がにじみ出ておりますが、怒りというよりは今にも泣き崩れそうなのです。どうしたのかと尋ねてみしても、ファラモンにお話したいというだけなのです。用件を尋ねても、私には話せない、王に引き合わせて欲しい、これは二度と口には出来ない、一言も話すことが出来そうにない、と言っているのです」と返事をしました。ファラモンはその人を部屋の中に入れなさいとユークラットに指示しました。ユークラットは指示に従いました。その紳士はどんな振舞いかたをしてよいのかとても不安げな様子で王の前に進み出ました。王は、そのことを素早く察して、「さあ、私の前だからといって、そんなにかしこまる必要はありませんよ。友人に話し掛けているのだと考えて下さい。あなたの悩みを打ち明けてもらえば、友人としてお力になりますよ」ととてもやさしく語り掛けて、彼の重圧を払いのけました。この訪問客は「陛下、不幸なスピナモンに友人ということばを使わないで下さい。友人はいましたが、私の手で殺めてしまったのです。そうです、スピナモンの手で殺めたのは確かですが、陛下、これはファラモン王にその罪があったのです。私がやって来ましたのは、王様の許しを請うた

めではなく、私の悲しみを、そうです人間的な生活を持続させることが出来ないほどの大きな悲しみをお伝えするためなのです。今後はどんな出来事も夢か束の間の気晴らしに過ぎないのです。この苦悩が私を捉えて離さないのです。ああ、陛下、私の心は傷つき苦しんでいるのです。どうかこんなことを言うのは、私があまりにも大きな悲嘆に暮れているからだと免じて戴きたいと思います。と申しますのは、今日この日、この不幸せな手が大量の血を流してしまったのです。これに関しては、実はその罪が陛下にあるのです。ああ、あんなことになる前に死んでいればよかったのに」と語りました。ここで、この訪問客は話を中断し、しばらく考え込み、以前よりは少し落ち着いた様子で、つぎのように話を続けました。

「悲しみに暮れるにはそれなりのわけがあるのです。悲しみは誰にでもあることですので、みんなそれに耳を傾けるべきです。陛下は耳を傾けていらっしゃらないと思います。実は私は今朝、不幸にして最も大事にしていた人物を決闘で殺めてしまったのです。陛下の御前ですが、友を返してくれと言いたいのです。私から友を取り上げたのはファラモン王なのです。慈悲深いファラモン王が臣下を殺すなんてことがある得るでしょうか。国の父が国民を殺すでしょうか。ところが、実際に、慈悲深いファラモン王が臣下を殺し、国の父が国民を殺したのです。人々は好運を追求しています。好運の分配にあずかるのは国王ですので、栄光と名誉はすべて国王に握られています。従って、法に反することを慣習にしまっているのは、国王の手落ちであり怠慢であり、罪でもあるのです。宮廷は流行と義務を協調させることができます。従って、違法なことが流行になる場合は、必ず宮廷の罪となるはずですが、でも悲しいことに、ファラモン王の領土では、名誉の問題と間違った名で呼ばれている専制君主的な慣習によって、決闘者が愛する友を殺害するのです。そして、判事は決闘者に振舞いを是としながらも有罪の判決を下します。恥辱こそ最大の不幸です。法に反したら死が、法に順じたら恥辱が伴う場合に、どうしたらよいのですか。私に関しましては、ああ陛下、親しい友との間に生じたこの出来事を考えると名状し難い良心の呵責と愛惜の念を覚えるので

す。耐え難い悲しみが募り、陛下の御前でも抑えられなくなってしまうのです。」彼はこう言うと、滂沱の涙を流し、「これから先、人々のこういった苦しみを取り除くことができるのは陛下だけです。どうしてもファラモン王には耳を傾けて戴きたいのです。ファラモン王には、私の口から、間違った政治によって人を殺めた人たちがどう感じているかを聞いて戴き、王の怠慢によって滅んだ人たちが要求する復讐について考えをまとめて戴きたいのです」と大声で泣き叫ぶのでした。

第85号 1711年6月7日(木曜日)

【アディソン】

粗削りで未消化な芝居において、時折、よく練られてはいるが
浅薄な詩句や調和がとれてはいるが些細なことが詰め込まれている
作品の場合より、氣質が好ましくうまく仕上がった幸運な人物に
出会うことがある。(ホラティウス)¹⁾

イスラム教徒たちは習性として、地面に何か印刷されたり書かれたものが見掛けているのを見掛けると、コーランの一節が載っているかも知れないと考え、その紙切れを拾います。実を言いますと、私にもイスラム教徒的な点が多分にありますので、どんなにひどいものであれ、印刷物が目に入るとどうしても読んでみたくなるのです。どんな著述家でも、状況の移り変わりによって自分の著作がいつなんどきどのような使われ方をするのか分かっていないのです。タバコの巻き紙にとても著名な作家の名前を見掛けることもしばしばです。私は何度も主教や大主教の言葉が記されている紙でパイプに火をつけたことがあります。そして、この数年間高名な人の随筆を燭台の縁飾りにしている友人を知っています。とりわけ私は、ある著名な作家の勝利の詩を読んだあと、その詩の断片を翌日の祝賀の日に爆竹に利用して、勝利を二度

1) ホラティウス『詩の技法』319-22.

祝ったことがあったのを思い出します。私はかつてバクスター氏²⁾の文が載っている印刷物がクリスマス・パイの下敷きになっているのを見掛けたことがあります。パイ職人がその紙を偶然使用したのか、それともこの縁起かつぎのご馳走を守るためにふざけて使用したのかは私には分かりませんが、その紙切れに記されている内容を読んでみて、この作家の敬虔さに対しても立派な考えが分かりましたので、本を買い求めることにしました。私はしばしばこういった何気ない読書から拾い物をし、時には、絶版になっているかももうロンドンの書店には並んでいないとても珍しい作品を見つけることがあります。そのため、友人たちが私の書斎を見たとき、二折本の並んでいる棚に長い二つの円筒形のボール紙の箱が置いてあるのを見て非常に驚きます。そこで、私は彼らにその箱に詰め込まれている博学で深遠な著述を見せてあげることになるのです。同様に、私は非常に役立った紙製の風やイギリス中のシルクハットを全部貰っても交換したくない帽子入れについて触れることも出来るのです。私のこういった詮索好きな気質とかどんな書き物でものぞいてみようとするでしゃばりな気質は、生まれつきお喋りが嫌いといった性格とあいまって、カントリーハウスに行くと時間がいくらあっても足りなくなってしまうのです。私はその家の壁を徹底的に見てまわり、壁に貼ってある印刷物を読んでしまわないうちは部屋から出たくないからなのです。この種のものでつい最近拝見したものは実に楽しいものでした。その作品が昔から大半のイギリスの人たちに受け継がれてきた『無邪気でだまされやすい二人の子供』³⁾という古謡だったのだとお知らせすると読者のみなさんは私が真剣ではないとお考えになられることでしょう。

このバラッドは手の込んだ装飾が一切なく単純明快で素朴な自然の模写となっています。物語はどちらかといえば悲劇的なものであり、ほかでもない

2) リチャード・バクスター (1615-91) は、名高いピューリタン聖職者でさまざまな論争を挑んだ。第445号、第598号にも登場する。

3) いわゆる片面刷りの紙に印刷されて販売されたバラッド (ブロードサイド・バラッド) で最もよく知られたバラッドのひとつ。

それが自然の模写であるという理由で人々に気に入られているのです。詩句にはどうしてもなく愚直なものもありますが、情趣は純粹で飾り気がありませんので、内面に人間性と憐憫の情を備えている非常に洗練された人々の心を動かすことが出来るのです。挿話はテーマに相応しく、憐憫を喚起するのに十分なものとなっています。そういうわけで、作者(誰であるかは不詳)がこの物語を嘲笑の的に転じているのではないかと思えるほど卑しい語句とお粗末な表現で語っているにもかかわらず、物語全体はとても感動的なのです。言い回しは見劣りがするのですが、思潮は、私がこれまでに述べましたように、すべて真に迫ったものなのです。そこで、言葉にうるさくない人たちあるいは言葉のくろうとであっても自然に対する偏見のない真の審美眼を備えた人々を満足させることが出来ます。幼く何も知らない可哀相な子供たちを残して死んでいく両親の境遇と言動が非常に哀切を込めて語られますので、善良な読者なら心を動かされなければいけません。『胸の赤いコマドリ』に関しては、実際には少し詩的な装飾が施されています。このバラッドには、素朴さのなかにも作者の才能を示すために、古代ローマの偉大な詩人が対比をするときに利用したのと同じ虚構が伺えます。つまり、ホラティウスのことを念頭に置いているのです。ホラティウスは、子供の頃、寂しい森の中で眠り込み、哀れみをかけたキジバトが木の葉を掛けてくれたありさまを描写しています。

そびえたつヴルトゥール山中

プーリアの国境、乳母もいなく、

私は幼い頃遊びつかれて

心地よい眠りに襲われた、

ハトが身体をギンバイカの枝でおおってくれ

やさしく囁きながら快適な眠り誘ってくれた。⁴⁾

人間性をふんだんに備えた偉大な才人であり、当代きっての詩人であり批

4) ホラティウス『頌詩』3.4.9-13.

評家だった故ドーセット卿⁵⁾が、イギリスの古謡を数多く収集し、それを読むのを特別の楽しみとしていたという話を耳にしたことがあります。ドライデン氏も古謡を好んだのは確かであり、現代のとても洗練された作家の中にも同じ趣向の人を数名挙げる事が出来ます。

同様に私は、読者のみなさんにこのテーマに関するモリエールの考えを引合いに出すことが出来るでしょう。彼は『人間嫌い』の中で⁶⁾、真に崇高な魂と才能を授かっている人たちだけが、ささいな嘲笑の的といったイメージを払いのけて、素朴であらわな自然を称賛することが出来るのだと述べているのです。あら捜しをすることでしか識見を示すことが出来ない気取った才人⁷⁾については、彼らは気に入ることが自然の美しさしかないような作品を称賛出来ないのです。彼らには自然の美しさとともに特別な長所が備わっているこういった作品の楽しみ方が分かっていないわけです。

5) 第6代ドーセット伯爵チャールズ・サックヴィル (1643-1706)。

6) 『人間嫌い』1.2 で、アルセストはオロントに向かって、新しく流行しているソネットより昔の歌の方が優れていると語る。

7) グレゴリー・スミスによると、アディソンはおそらくトリー派の出版業者ジョン・モーフューが1711年に出したウィリアム・ワグスタッフの3ペンスパンフレット『親指トム物語について』を念頭に置いているとのことである。